子学寄附講座　特任助教
「難治性虚血性疾患の治療を目指した高性能一酸化窒素運搬タンパク質の創製」

・小川幸恵　熊本保健科学大学　保健科学部　リハビリテーション学科　助教
「ラット海馬CAI ニューロンにおけるシナプス内外GABA$_A$受容体への揮発性麻酔薬作用の相違」

第十三回　医学国際交流助成金（外国人留学生奨学金）の授与

当財団は外国人留学生への支援活動の一つとして、外国人留学生への奨学金授与を行ってきました。本年も「第十三回外国人留学生奨学金授与候補者選考委員会」が前記助成金授与候補者選考委員会に先立って開催されました。今回は医学教育部長から四名、薬学教育部長から二名の合計六名の推薦があり、その中から四名が授与候補者とすることが決定され、九月十八日の常任理事会及び九月三十日の理事会を経て承認されましたが、その後、一名が退学したため、次の三名が授与者となりました。授与者三名の氏名は次のとおりです。

・蒋（ジャン）　青（チン）
熊本大学大学院医学教育部　博士課程四年（中国）

・張（ザハン）　三（サン）　兵（ビン）
熊本大学大学院医学教育部　博士課程四年（中国）

・呉（オ）　英（ヨン）　先（ソン）
熊本大学大学院薬学教育部　博士後期課程二年（大韓民国）

第十四回医学研究助成金及び第十三回外国人留学生奨学金の合同授与式開催

平成二十一年十月十三日（火）午後五時半より、医学部第一会議室において、右記助成金及び奨学金の合同授与式が行われました。神原武理事長から助成金・奨学金とも各件十五万円が授与者一人ひとりに手渡されました。

あいさつに立った理事長は「この財団は医学医療に理解のある多くの方からの浄財によって運営され、研究助成や外国人留学生への支援も重要な事業の一つであること、貴重な助成金・奨学金を研究のために有効に使って、さらに研究の発展をはかってほしい」との励ましの言葉が述べられました。

これに対して、受賞者を代表して柿添豊氏と張三兵氏から、受賞の喜びと感謝の気持ちが返礼として述べられ、今後も研究に邁進する旨の決意が述べられました。

最後に受賞者を囲んで同席した所属教授および財団常任理事も加わって記念撮影をして式は終了しました。

なお、受賞者のプロフィールは一八頁に掲載しています。

常任理事（広報担当）　木原　信市

健康・医学・医療情報誌「まいらいふ」発行

平成二十一年度も三十二頁からなる月刊誌「まいらいふ」を、熊本日日新聞社及び電通九州と共同で、毎回三十六万部発行し、当財団は医学関連記事の執筆、監修、編集を担当しました。しかしながら、全国的な新聞業界の業績不振で熊本日日新聞社も刊行物の統廃合により合理化を進めざるを得ない状況になる一方で、広告協賛企業が美容や健康増進に関連した会社に偏ってしまい、執筆記事と広告の区別がつきにくいケースまで出てきたことから、当該年度をもって「まいらいふ」を終刊することになり、平成二十二年三月末に『卒業号』を発行いたしました。

思い起こせば「まいらいふ」の創刊は平成十一年一月号でした。平成八年に熊本大学医学部百周年記念事業の一環として（財）肥後医育振興会を設立したことを県民に周知するための新聞特集号や百周年記念新聞特集号の制作を共同で行ったことから緊密な関係になっていた熊本日日新聞社広告局とはすでに「肥後医育塾」を共催していましたが、さらに共同作業でそれまでに類を見ない形式の健康・医学・医療情報誌、つまり大学医学部の教授陣が執筆し、広告代理店と新聞社が制作して新聞配達網を使って配布する雑誌を出そうということになり、半年以上の準備期間をかけて創刊に至りました。その雑誌「まいらいふ」のコンセプトは「熊本の美しい風土の中で健やかにたくましく生きておられる方々を紹介しあうとともに、正確な医学・医療情報を提供することによって、家族の健康を守り、また育児に介護にと奮闘されている主婦の方たちを応援する」というものでした。正確な医学医療情報が三十二ページの全ページカラーの上質紙に印刷され、毎月四十万部が県下津々浦々の各家庭に無料で配布されるという画期的な事業が始まったのでした。

さらに平成十一年度から平成十三年度にかけては、「まいらいふ健康講座」と銘打った公開市民セミナーを毎年三回、熊本県内の地方都市九か所で開催しました。また、平成十二年四月から平成十三年九月にかけては、テレビ番組「まいらいふ―からだの博物学」を毎週土曜日十一時十五分から三十分まで、熊本放送で総計七八本放映しました。

このような「まいらいふ」事業によって、熊本県民の利益はもとより、熊本大学医学部の教授たちは医療情報を発信できるメディアを得、熊本日日新聞社は新たな販売促進ツールを獲得でき、地場企業はエレガントな広告スペースを使えるようになり、そして肥後医育振興会は監修費により他の公益事業のための費用を安定的に確保できることになりました。特に雑誌「まいらいふ」が十一年三か月百三十六号の長きに亘り発行できたのは、このように多くの皆様のためになるという条件を併せ持っていたためだと思いま